



# 在職十年を振り返る(三)

由良地区公民館長 枝川 隆 亮

## ◎平成十九(二〇〇七)年

この冬は、久方ぶりに積雪が多く、家庭では水道管の凍結やボイラーの破裂、また奈具海岸道路では大型車が脱輪し、長時間交通停滞をしています。

宮津市では、避難用に市営住宅を開放しています。

京都府立大学との提携が平成十四年から始まり、環境共生事業がスタートし「由良の魅力再発見とミュージアムづくり」を目的に「エコミュージアム」が始まりました。

平成十四年四月から完全実施された学校週五日制のなか、地域で子どもが体験活動を通じて

ふれあいの場を持たせることを目的として、平成十四年度から

「子供料理教室」が始まり、平成十九年度は小学生と園児たち三十七名が参加をしています。

由良小学校では、地域温暖化など環境教育に中心的に指導したことが認められ、環境大臣賞を受賞しています。

テレビ放送もデジタル時代を迎え、電話も高速化されADSLがスタート、インターネットも早く接続できるようになりました。また、この年から由良川河口で「てんころレース」が始まりました。

天橋立・世屋高原・大江山な

どを含む「丹後天橋立大江山国定公園」が誕生しました。

## ◎平成二十(二〇〇八)年

「丹後天橋立大江山国定公園」に由良ヶ嶽が編入されました。

二月、雪の降る中、由良ヶ嶽を案内する目的で、国民宿舎上の更地に「由良ヶ嶽山の案内所」を府立大学学生・地元住民らの協力で完成しました。

## 第二回てんころレース開催。

地区をあげて念願の医療機関宮津市立由良診療所(堀川義治医師)が十二月一日に開業しています。

選任第五代自治連会長として

柘田益一氏が就任。

## 第十二代公民館長 枝川隆亮

「丹後由良の歴史年表」の制作に着手しました。

## ◎平成二十一(二〇〇九)年

第三回てんころレース開催。

庄内由良より訪問団来由。

この年から運動会は幼稚園・小学校と合同となり、毎年開催するようになりました。

「山庄太夫のぞきからくり唄」の伝承者、森田くまさんが一〇

二歳で逝去されました。

スーパー「にしがき由良店」が閉店となり、地区民は買物難民となりました。

生涯学習講座(人権学習)として、海洋高校三村和人先生に「世界にタツクルく固定観念にとらわれないく」をテーマに講演をしていただきました。

宮津市立小・中学校再編計画に係る地元説明会を宮津市が実施しています。地区でも由良小学校再編計画に関する会議を頻りに開催しています。

## ◎平成二十二(二〇一〇)年

選任第六代目自治連会長として藤本繁光氏が就任。

幼稚園、小学校の放課後に対応するため「放課後クラブ」が公民館を会場として、地元有志の方々で始まりました。

昭和四十一年から十一年間、公民館長として地域文化の継承、スポーツ振興にご尽力をいただきました四方寿朗先生が逝去されました。

(以下次号)

# 行事報告

主事 磯田 充亮

映される時間帯でのプレーで、話題になりました。

## ◎五月二十五日(日)

交通安全・防犯教室

内容は後頁に記載します。

## ◎六月十五日(日)

グラウンドゴルフ大会

(個人戦)

蒸し暑い日、時々吹く風が心地良く感じる当日、男子13名、女子8名、計21名が参加。五班に分かれ8ホールを2回廻り、16ホールの合計打数で順位を競いました。

【成績】

(敬称略)

男子優勝：森本松二(46打)

女子優勝：浜野尚子(47打)

今年はグラウンドの整備が進まず雑草が生え、プレーに支障となりましたが、参加者はプレーに専念し、和気藹々とゲームを楽しんでいました。

当日はサッカーW杯の初戦、日本対コートジボワール戦が放

## ◎七月六日(日)

四部対抗

バレーボール大会

毎年、猛暑の中での戦いでしたが、今年は初夏のような涼しい日、由良自治連合会と共催で開催しました。男子43名、女子40名、計84名が参加。各部少数精鋭チームで対戦、今回は「打倒女子三部」の声を聞くことはなかったが、他チームは試合中闘志を燃やし、各セットとも接戦となり、女子三部は苦戦し四部に一セット奪われたものの着実に勝ち、24連勝を成し遂げました。

男子は三部が「女子部に負けるな」と発奮、事前に練習し、四年ぶりにアベック優勝をしました。

【試合結果】

男子の部 女子の部

優勝……三部 三部

準優勝……二部 一部

三位……四部 二部

四位……一部 四部

## ◎八月十四日(木)

四部対抗

ソフトボール大会

本大会は、お盆で帰省されている皆様と親交を深めるため、毎年開催されています。今年も各地に甚大な被害を出した台風11号通過(舞鶴から日本海へ)後、快晴が続く中、女性3名を含む48名が参加。優勝をめざし熱戦が繰り広げられました。試合はトーナメント戦で、三位決定戦を含む四試合を行いました。試合が進むにつれ、好守強打が連続した試合となりました。

優勝戦一部対二部はホームラン6本を含む乱打戦となり、後攻の二部は最終回、2点差を追ってツーアウト満塁となり、打者はレフトオーバーの長打を放

ち逆転優勝をしました。

二部は女子3名の活躍もあり、昭和53年以来36年振りの優勝を成し遂げました。

【試合結果】

優勝……二部 準優勝……一部

三位……四部 四位……三部

(今回は6名の方にホームラン表彰しました)

開催にあたり、グラウンドの草刈り、整備に多くの方にご協力いただきありがとうございます。

## ◎八月二十四日(日)

盆踊り大会(地藏盆)

福知山地区に大雨特別警報が発令され、小雨降る中、子供地藏盆終了後開催しました。

盆踊りの三拍子「櫓」「提燈」「踊り子」の「提燈」を小雨のため取り離し、サーチライトでの実施となりましたが、毎年お世話になっている「由良踊り保存会」等のご協力により、盛り上げていただきありがとうございます。

## 交通安全・防犯教室

最近、宮津管内で交通事故や盗難事故が多発し、また、悪質な「振り込め詐欺」が多発し、市民の安全と安心を脅かしています。このような事件事故に遭わないように、宮津警察署から生活安全課長、交通課長、由良駐在所の方をお招きして教室を開催しました。

主な内容は次のとおりです。  
交通課長からは、

管内では年に一〇〇件位の人身事故が発生している。特に、運転中に「他のこと」を考えた「脇見」をして追突する事故が多い。安全を人任せにして緊張感に欠けている。もっと前をよく見て運転するように、特に今年は死亡事故が二件あり、いずれも道路を横断中の高齢者が絡んでいる。必ず左右を確認して斜め横断はやるように。また、夜、特に雨の日が一番危ない。無用な外出はやめるように。「てんかん」「認知症」等の持病がある方は、早く診察を受ける

ように。特に高齢者には、運転免許証の返納制度について説明がありました。他に事故防止について事例をあげ、説明がありました。

生活安全課長からは、防犯について講話があり、管内の主な事件について説明がありました。

最近ではガラスを割り、車内の物品を盗む「車上狙い」、KTR 駅駐輪場での「自転車盗」、スーパー、コンビニでの「万引」、病院、スーパー等での「置き引き」等が多発している。予防として鍵は必ずかけ、車内に貴重品を置かない。自転車には鍵をかける。持ち物から目を話さない等、ちょっとした注意で予防はできます。また「空き巣狙い」も増えています。そのためには被害に遭わない環境作りです。見なれない人を見かけたら声をかけるか、特に怪しいと思えば一一〇番通報を、防犯グッズの利用、お出かけ時には近所への

声かけと戸締まりを心がけて下さい。と町をあげての防犯対策を願っていました。

次に「振り込め詐欺」についての講話がありました。

「振り込め詐欺」は「特殊詐欺」とも言われています。親族や警察官等を名乗って騙し、現金をATMから振り込ませることから「振り込め詐欺」と言っていました。最近では現金を直接家に受け取りに来るもの、指定場所を持ってこさせるもの、レターパックで送金させるものなどがあります。

次に「振り込め詐欺」等の手口について説明がありました。(内容は今年六月に発行しました「公民館だより第一五一号」に掲載された「特殊詐欺の被害防止について 由良駐在所小林敬互氏文」に詳しく記載されているので省略します。)

中で新しい手口として「ロト6(宝くじ)の当選番号を教えると現金請求するものです。これは新聞発表前にインターネットで公開しているのを利用

し、あたかも犯人が当たったように騙すものです。

次に京都府警から、被害根絶のための緊急メッセージについて説明がありました。

一、午前中のお金の用立て電話は即警戒。(統計的に時間は九時から十二時まで、曜日別では月曜日が多い。これは若い者が不在な時間帯である。)  
二、心当りのない会社から電話やパンフレットが来たら即通報。(貴方に特別な情報を教えます。と言って未公開株、CD2取引権等の情報を教え騙す。)

三、ゆうパックやレターパック宅便での送金依頼は即一〇番。(正規の送金には利用しない。)

以上、不審な電話を受けた場合は、即一一〇番等の連絡をお願いいたします。

また、若い者は高齢者に「気をつけやー」と、常に伝えて下さい。等の被害防止について講演がありました。

# 昭和を想う

## 飯澤 登志朗

去る九月十五日、はまの子体育館で由良地区「敬老会」が開催された。升田自治連会長他、関係者の心温まるおもてなしに感謝しながらの一日であった。

特に港地区の「和の会」の皆さんによるアトラクションは、内容のおもしろさ、チームワークの良さに、会場から大拍手が湧いていた。

由良地区の今年の該当者は、二八五名、出席者は一〇〇名を数えた。そしてめでたく米寿を迎えられた方は十二名である。

由良地区の高齢化率は四十六%を超える長寿村であるが、「敬老の日」とは従来「老人の日」だった名称を変えて祝日としたもので、始まりは兵庫県多可郡野間谷村（現在の多可町八千代区）で里おこしの為に当時

の村長さんを中心に、一九四七年（昭和二十二年）に「老人を大切にして年寄りの智恵を借りて村作りをしよう」と発案し、運動を起したのが元で祝日として「敬老の日」が定められたものである。

趣旨を踏まえ、私たちも只お世話になるだけではなく、いつまでも地域に受け入れられる老後でありたいと考えている。

「昭和という国家」司馬遼太郎（NHK出版）にこんな記述がある。戦前の教育勅語である。

「朕<sup>チン</sup>惟<sup>オモ</sup>フニ我<sup>ワ</sup>が皇祖<sup>コウソ</sup>皇宗<sup>コウソウ</sup>國<sup>クニ</sup>ヲ肇<sup>ハジ</sup>ムルコト宏遠<sup>コウエン</sup>二徳<sup>トク</sup>ヲ樹<sup>タケ</sup>ツルコト深厚<sup>シンコウ</sup>ナリ……小学校の時、覚えさせられたものだから経年で忘れていた。

式の際、奉安殿から石のバルコニーのある玄関を通り講堂に

移され、校長先生が白い手袋をはめて厳かに包みを解かれ、箱からそつと勅語を取り出される。

そして前述に続き「爾<sup>ナニシ</sup>臣<sup>シ</sup>民<sup>ミン</sup>父母<sup>フ</sup>二孝<sup>コウ</sup>二兄弟<sup>ケイテイ</sup>二友<sup>ユウ</sup>二夫婦<sup>フウフ</sup>相<sup>アイ</sup>和<sup>ワ</sup>シ……」と続く。

子供心に親に孝行しろ、兄弟仲良く、夫婦は助け合つてと理解していた。

教育勅語は昭和十年前後生れの人たちであれば、頭の片隅に記憶として残っているのではと思う。

戦争に駆り出され、軍需産業に働き、勤労奉仕の毎日で勉強時間はほとんどない時代である。「御国の為に」「欲しがりません、勝つまでは」全てがこのような教育を受けていた。ある日突然、軍服の襟章を取り外した先生から「民主主義とは」「憲法九条について」このように一八〇度転換した戦後教育に変わったのである。

その奉安殿や講堂のあった場

所に鉄骨の建物の骨組みが現れた。

介護施設は、現在から将来に亘り少子高齢化の進む現実から必要不可欠であることは言うまでもないが、違和感を感じずにいられない。

老々介護や独居老人の福祉の問題は大きな課題であるが、特別養護施設が地域の幸せの為になることを願う。

先日、毎日新聞の「男の気持ち」欄に七十六歳の男性の投稿があった。「連れ添う」と題して、後期高齢者の思いが綴られていた。

『自分は学生時代から自炊を含めて、洗濯や身の廻りの整頓をすることは自然と身に付いていた。内心「俺はそんなことできろぞ」と思っていた。すると妻が「あなたなら私が死んでも大丈夫だね」と突然言った。実は長年連れ添ったお前がいたから洗濯をしたり、買物に行ったり、料理をしたりして自慢み

たいなことを言っているが、もし妻が本当に先にいなくなれば、そんなこと一人でできるだろうかと、言葉が詰まった。

最後に妻が「二人同時に死ぬればいいけど」と言ったのを聞きながら、急に老妻が愛おしく感じられた。』(一部省略)

自分をその立場に置き換えてみた時、やはり教育勅語で教えられた、いつまでも助け合える夫婦でありたいと願っている。

昭和元年(大正十五年を含む)生まれの方が今年米寿を迎えられたが、昭和がどんどん遠くなっていく。

先に述べたように、学徒動員や勤労奉仕の名のもとに勉学の時間は制約され、また食糧難で十分な栄養も摂れずの少年少女時代であったが、決して不満を言うつもりはない。

昭和を生きた為に経験した豊富な知識と忍耐力があるから、生きてこられたのである。

「昭和天皇実録」が公開され

たが、新聞紙上に掲載された内容は一般人には理解するのに時間が必要だが、昭和天皇の度重なる苦渋の決断を感じることはできる。

昭和生まれは、戦前から終戦を経て団塊の世代、経済成長そして低下によるリストラ等、それぞれ立場で喜怒哀楽の人生であったと思うが、お互いが助け合う気持ちは不変でなければならぬと思う。

今夏も各地で大雨による被害で多くの人が犠牲となられた。幸い難を免れた方々が近所の助け合いで命拾いをしたと語られている。

何百年以上と続く由良の歴史の中、昭和の六十四年間は短いかも知れないが、皆さんと一緒に過ごした大切な期間であったことは間違いないことであり、これからも助け合いながら老後を過ごしたいと願っている。

## 丹後隠れ里―凡海【おおしま】

### 由良ノ庄

#### ―由良川街道―

京都丹後学会 京都丹後ビーチ 山椒太夫外伝 丹後の古社・古寺巡礼 由良川街道 京都丹波越え 大和建国

元丹後ふるさと観光大使 代表 坂本与一郎

## 謎の山椒太夫(II)

「貝原益軒の『西北紀行』に次のような記述がある。

由良の港に至る。其間に俗にいふ山椒太夫が子三郎が墓有。海辺に遊、小浜など云所あり、由良は宮津より二里卅町有、民家三百余あり、石浦(由良の内也本村より半里)と云所に山椒太夫が屋敷跡として、石の水船有、

はそれ以前から太夫の存在を示す伝承が広まっていたと考えられる。

丹後の由良に江戸中末期頃の成立と思われる『山庄由来』という版本が存在している。米屋甚平本といわれるもので、説経『さんせう太夫』と比較すると、在地の性格が随所にあらわれていて、もう一つのさんせう太夫像を浮かび上がらせてくれる。(中略)

これによると、元禄二年(一六八九)という時代に山椒太夫屋敷跡や三郎の墓などがあったということになり、丹後由良に

山椒太夫は丹波国桑田郡の出身で、商人となっており、丹後の青木山(現在の由良ヶ嶽)に金鉢を見出してそこに住みつくようになったとあるところなど

は、目はしのきく人物としてイメージされており、しかも丹波の地頭大江時兼より、『山庄太夫は器量ある者なれば…』と信任され、国分寺普請の大役を仰付かるや、それを巧みに利用して金銀を取り集め、大福長者にのし上がった知恵才覚の持主として描かれている。

説経をみると、そこでは太夫の映像は、極悪人としての所業をくり返し積み重ねるだけ的人物であったが、それに比べるとこれは由良の土地の開発者になぞらえている。

由良から川沿いに約二キロ、国道を南に行くと上石浦に至るが、そこに益軒が訪れた山椒大夫妻敷跡といわれる遺跡がある。小高い山麓台地には蜜柑の木が植えられてあり、格別特徴のない、この辺りによく見受けられる光景であるが、七世紀後期の古墳跡が崩壊し、石室が露出したまま残っているのが見られる。これが益軒の見た石の水

船であろう。

また、太夫が多くの奴隷を監視する必要から設けたといわれる物見台や、由良川の中洲にあったといわれる亭【あずまや】や馬駆け場の伝承などもあつて、千軒長者といわれた太夫の規模の大きさがうかがわれ、山庄略由来の記述を補つてくれる。

(岩崎武夫著「続さんせう太夫考」平凡社選書23刊より)

「丹波のさんせう太夫(三庄太夫)は本村三野【みつの】地内川谷【かわたに】の住民にして、山椒【さんしょう】の皮を集めて之を丹後地方に鬻【ひさ】ぐを業とせり。往復の途上丹後の七廻八峠【ななまわりやとうげ】を越ゆる毎に、必【かならず】同一の石に躓【つまづ】きしかば、怪みてその石を掘り取りしに、其【そ】の下より巨多の小判金を発見して忽【たちま】ち大富豪となれり。かくて川谷

の田地を買収し、区民【くみん】を小作人とし大に威福を張れり。然【しか】るに三庄太夫尚【なお】大望を起こして由良【ゆら】に移り、名を後世に残さんが為凶悪【きょうあく】の徒の巨魁【きょかい】となり、つひに由良岡田等の三庄【さんしょう】を横領して横暴を逞【たくま】しうしたり。かくて山椒大夫のちには三庄太夫となりぬ。誠に伝説の好標本といふべし。」

(『北桑田郡誌』第三編 各村第十二 大野村 大正十二年)

(梅原猛著「京都発見4」新潮社刊より)

「私は『由良の歴史をさぐる会』の四方寿朗【しかたとしろう】氏らの案内によつてさんせう太夫ゆかりの地を訪れた。また『山庄略由来』という本を見せて頂いた。これは江戸時代の中期から後期頃のものと思われ

るが、米屋甚平という人によつて、この地方に伝わる伝承を元にして書かれたものである。この本に依【よ】ればさんせう太夫は村上天皇の頃の人で、元々この地の人ではなく、丹波国桑田郡川谷村の出身であつたという。若い頃、商売のため由良の地にやつて来て、青木山という所で鉱山を見付け、それでその地に住むようになった。おそらくさんせう太夫はその鉱山の鉱石採掘によつて富を蓄えたのであろう。そしてまたこの丹後の地の和江村の国分寺の修復にも腕をふるい、財を増やした。

(中略)

もちろんこの『由来』も真実かどうかは解らない。丹波のさんせう太夫は孝行者で努力家であつたという伝承がある。金の鉱山を見つけてから人格が変わつたのであろうか。彼はその富を利用して由良の地で製塩業を営んだらしい。由良の製塩業は一時大変栄えたものの、瀬戸内

海の製塩業に押されて衰退したというが、それでもなお由良の塩は質の良い塩として尊ばれたという。」

(梅原猛著「京都発見4」新潮社刊より) (青木山は由良ヶ嶽の別名)

「たとえば、中世の説経節などには、太夫を終始一貫悪の張本人として、その所業を克明に暴露し、告発しているが、「略由来」は直接の悪人としては大江時兼という地頭を設定し、その方に話の中心を移行して、太夫は副次的な悪人として、その責任を軽く印象づけようとする意図が感じられる。こうしたことは、悪は悪として認めながらも、太夫の別な側面、由良という土地にとつて、太夫がいわば開発者のような位置にいる人物であることを暗々裏に示したのかも知れない。  
昔は熊野系の三社権現を祭っていたといわれる由良神社の宮

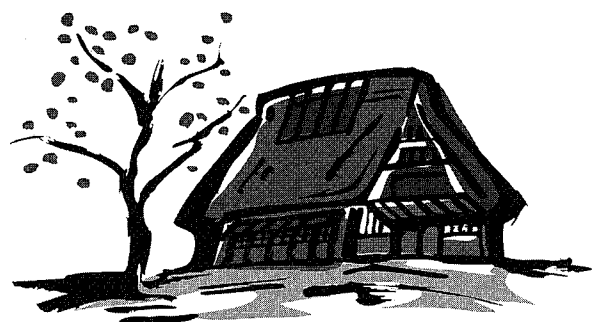
司である今城力雄氏はこの点にふれて、山椒太夫はもと丹波国水上郡(兵庫県)の産で、一世の事業家を夢見て由良川沿いに河口へ出て、由良ヶ嶽の東のふもとをその活躍の基地とし、農業、鉱山、水産、貿易、商業などが、それが大当たりして大長者にのし上がった幸運児であるといわれている。まさに開発者のプロフィールといえよう。そして由良はむかしは宮津とともに裏日本の代表的な港で、北海道渡航の帆船の集散地であったともいわれ、それが山椒大夫の出現で宮津をしのぐ港町となり、由良の港の千軒長者として君臨していたというものである。  
宮司は慎重な口ぶりで、いうまでもなくこうした話は伝説の域を出ないもので、単純に史実と混同されては困るといいながらも、悪人としての側面だけでなく、太夫を土地の開発領主のような人物として冷静に受け止

めようとしているのが了解された。「略由来」の立場を一層徹底させて、山椒大夫を悪人として単純に切り捨てる見方を排して、由良という土地を発展させた実力者として評価しようとしている。こうした態度は、森鷗外の『山椒大夫』にもみられるもので、偶然とはいいながら、その相似にあらためて注目させられた。鷗外は、山椒大夫の処置について次のように描いている。

山椒大夫もことごとく奴隷を解放して、給料を払うことにした。太夫が家では一時それを大きい損失のように思ったが、この時から農作も工匠【たくみ】の業も前に増して盛んになつて、一族はいよいよ富み栄えた。  
(岩崎武夫著「続さんせう太夫考」平凡社選書23刊より)  
(京都丹後学講座「山椒太夫外伝―千年超えの伝承―」参照)

丹波・丹後の二人の悪党  
平安時代の酒吞童子と、古代の鬼退治には、自ずから違いがある。

古代のそれは、大和と丹後王国の同盟強化のための豪族和邇を中心とした日子坐王父子(子の丹波道主命)の入りムコ派遣軍であり、丹後王国の姫達の大和後宮入りという同盟関係の約束ごとであったように思われる。



# 川柳

大森 美智子

狂わない時計が重荷になることも

石けりの石見当らぬ都市砂漠

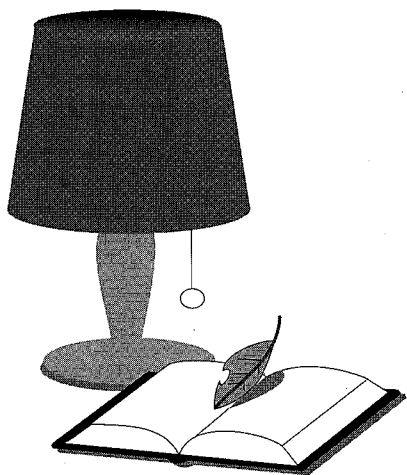
恍惚に流されぬよう新刊書

ごきげんようグーチョキパーを繰り返す

コーヒーはブラックどっしり構えます

ローン完済でじっくり雲の流れなど

巻き戻ししたい女の歳月上



# 短歌

枡本 清

青い空秋の目を忘れじと

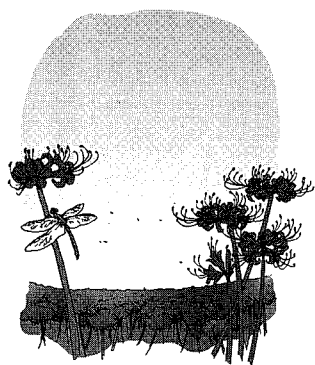
丹後の里にも彼岸花咲く

燃え上がる炎のような彼岸花

群れにバイク暫し止めん

奥飛驒おくひだの山脈つづら九十九折

霜白く空は青濃く金山紅葉



# 老楽笑歌

坂本 妙子

笑い合う仲間があつてふれあいの

何時も明るくい心の窓よ

いろいろといろいろありました

老が全てを丸く収める

ガス消した財布も持った鍵かけた

私はどこへ行くのでしようか

物忘れとボケは違ふと云うけれど

今の私は境界線上

長生きはしたくないわと云いながら

毎日散歩かゝす事なく



## 『京の蘭方医』

## 新宮涼庭伝（文政年間）

## 新宮涼輔

（京都開業）

文政二年（一八一九）、京都に出た涼庭は、一体誰を頼ったか、明らかでない。開業前は、一時旅館にいた。涼庭が開業した場所は、室町通高辻南（室町綾小路下ル）である。この文政二年には、涼庭は丹後の谷候を診察したようである。

すなわち、涼庭は余は二十七年前に（谷）候の病を診たと述べ、余が京都に移ってから二十七年経ったと書いているので、文政二年のことであろう。谷候とは、丹波山家一万石の藩主である。

（元端・山陽と涼庭）

翌、文政三年（一八二〇）のことについては、頼山陽が涼庭

にあてたと推定される書翰がある。これは奥道逸宛であろうともいう。頼山陽は小石元端を頼って上洛し、元端には、種々世話になっている。その妻女も、小石家に下女としてきていた近江の梨影なる女をいったん小石家の養女として、妻に迎えたほどである。この時、梨影が懐妊したのが辰蔵（同年十月七日生る 夭死）である。

この当時、涼庭と元端の交友をしめす資料はないが、のち文政七年（一八二四）に涼庭が『奉西疫論』を刊行したとき、元端は跋を寄せている。元端がこの跋で涼庭との関係を述べていないのは残念である。山陽の伝記を見れば、涼庭と山陽との交渉があったが、涼庭と元端と

本質的に異なっていたからである。ろう。

（藤林普山と涼庭）

当時蘭学者として活躍していたが、文政元年（一八一八）頃から『和蘭薬性弁』の著述にとりかかった。これには、新宮涼庭が参加している。刊行は文政五年（一八二二）で、涼庭またこれに序文を寄せている。普山と涼庭がいかなる関係であったかは、近藤惟和の序文である程度推察できる。

「（前略）さきに丹州内海君疾あり。治を四方に叩くも驗無し。後崎陽に遊び、診を西医に請うに数年の患立どころに癒ゆ。君大いに其術を奇とし、就て医学の則を問う。西医之に語るに六則を以てす。其一は解剖、其二は生理、其三は病理、其四は薬性、其五は治疾、其六は撰生なり。なお匠の家を建つるに次序あるが如しと。君益々其説に心酔し、吉雄、新宮二先に議

し、其の書を得て載帰す（中略）藤林先生に囑して訳を請う。先生六部中に就いて先づ薬性書一篇を訳す。新宮先生これに与かる。藤林先生之を訳す。是を戊寅（文政元年）に肇め五甲を逾ゆ（下略）」とある。

涼庭の序文には「我藩の大夫内海贖齋、此書の世に益あるを信じ、藤林普山に属（囑）して之を訳し、不肖碩をして之に参ぜしむ」とある。ここにいう内海贖齋とは、涼庭の長崎行きに尽力した内海全のことである。彼の学問に対する情熱は、この二事をもつてもわかるのであるが、当時蘭学者として翻訳方面に令名のあつた藤林普山に訳文を囑し、自藩出身の新進の涼庭を参与させた（おそらく文政二年京都開業頃か）ところにある。

（涼庭の診療）

『驅豎齋家訓』（※写①）には、

余は京都に出張し、大いに流行したれど、五ヶ年が間は乗輿致さず、三十七歳の時より乗輿致したれば(下略)とあり、『鬼国先生言行録』(※写②)にも「三十七歳後初めて肩輿かたこしに乗る」とあるから、文政六年(一八二三)は開業医としての涼庭にとつては記念すべき、エポックを画する年であった。

『鬼国先生言行録』によれば、次のような逸話によつてうかがわれる。涼庭は、大抵毎日宅診数十百人、午後往診は五十家におよんだ。涼庭は往診する時は、一刀を佩おび、外套とちう(意味…おおうもの)を被り、脚褌を穿ち、裳を褰あげて奔走した。家に帰る時間が惜しく、途中四条小橋の、おそらく屋台店で、田楽を食して病家に行き、家にあがると左手で刀を脱して右手で脈をと

時には徹夜其傍にあつて動静を看視し、あるいは夜中に門を叩いて急診を乞う者があれば起き上がり、従者を戒めてただちに往診し、少しも時間をかけることがなかつた。

常に曰う。大患にあつて其傍に坐し、親しくその苦悩煩悶を見、かつ父母妻子の憂感をみれば、惻隱の心油然而して禁じ難い。よつてその術を思いもしま

だ術を得なければ反覆之を考ふる。そうすると、治術を自得する。あたかも神助あるがごとくである。

#### (千両医者)

涼庭が、当時いかに流行したかは、涼庭自身が門生に語つた次の語によつて知られよう。

「今の医者で、収入の点で自分に及ぶものはまれであろう。山中春齡(鴻池善右衛門幸澄、鴻池八代の当主、白樂軒とも号した。天明五年(一七八五)生れ、天保五年(一八三四)、五

十歳で没)の謝礼のみで歳費をまかなうのに足り、他に年収二千五百両がある。年千両を得るものを千両医者というが、自分

はかくのごとくである。」  
かつ、これは医家として、必ずしも誉めた話ではない。涼庭が、のちに俗医と誹謗される一端も、かかるところにあると思

われる。  
涼庭の治療法は、患者によつて次の三種に区分された。

(イ) 薬屋治療↓療治急激にして薬価低廉。

(ロ) 付合治療↓他の医者に永くかかつている患者に、

最初他医の調剤と同様のものを飲ませて信用させ、あとは自分の技倆を尽くして治す法。

(ハ) 豪家療治↓治療に日を要してもよく、また苦い薬を厭うものに対する法。

最後の豪家療治には、伊丹の富豪小西某、前述の鴻池らがある。なお鍋島候の招きで往診し

た時には、謝礼として千両箱に熨斗をつけて贈られたので、涼庭は門人に「余は今一回の千両医者となれり」と語つたという。

かくて涼庭は余程の蓄財家となつた。しかも涼庭は喜拾を喜ばず、日常儉約に努めた。これには涼庭なりに一つの考えがあつた。今で言えば、ギブ・アンド・テイクにあたるもので、後述の天保の饑饉\*に、その主義はもつともよくあらわれている。したがつて、その行為は、俗医をもつて評されたことがあつた。その例を示しておこう。

〔※饑饉〕その年の農作物がよく実らず、食料不足すること

涼庭の門人、猪野玄碩の子宗碩が緒方洪庵に從学した時、同塾の門人に、「新宮は志操卑劣にして豪家のために腰を屈す、薬価に比して謝金の高きは、盗賊に類する」と罵られた。この時、宋碩はこれを弁じ相手を殺そうとしたという。

また、後年広瀬元恭は、新宮

は俗医であると言ったと伝えられる。このように涼庭の評判は必ずしも良くはなかった。それには誤解もあるが、その若干は涼庭自らが、その種子をまいたとみられても致し方がないであろう。

### （シーボルトと涼庭）

文政六年（一八二三）、シーボルト（※写③）が蘭館医として来日した。彼は広く自然科学一般に通じ、その鳴滝の塾には全国の後秀が従学した。文政九年（一八二六）二月、江戸参府に随行したシーボルトは、十日京都に入った。日本の友人たちが宿舎に訪ねてきた。シーボルトは次のごとく記している。「其中に小森肥後介及び新宮涼庭 RioTaniあり。涼庭はヨーロッパ学問の大崇拜者にして当地にて最も行はるゝ医師の一人なり。日本に於ける和蘭図書の最大所蔵家として、架蔵の図書は黄金三百枚に値する程なり。」

涼庭は、シーボルトによって高く評価されている。これは、あなたがち涼庭が長崎の蘭館医師として尽力し、オランダに名が知られていたことのみによるものではないだろう。換言すれば、涼庭の地位がかなり高まっていたからであろうと思われる。

### 『鬼国先生言行録』にある記事で、それによればシーボルトが日本に来た時、再三涼庭に書を寄せて教えを求めたが涼庭はこれに応えず、シーボルトが江戸参府の際も強つての希望で、やと腰をあげて面会したというのである。同書は跡部山城守が外国人に会うのは、従来種々の面倒が起るからと警告したからだと伝えているが、これは事実を混同したものであり、またシーボルトの『参府紀行』にも、涼庭のかかる態度には何らふれていない。跡部山城守の警告云々はさらに後のことである。

一体に文化・文政時代は、世

に仮政時代、または大御所時代として幕府の綱紀もゆるみ、文化の爛熟期であった。文化年間には、なお寛政改革の松平定信の方針を受け継いだ松平信明があつて、綱紀もさほどゆるんではいながつたが、その死後、とくに文政年間には全くの爛熟期であつた。

蘭学者への取締りが厳しくなつたのは、文政十一年（一八二八）十二月のシーボルト事件以後である。小森がシーボルトに会つて大いにもてなしたのも、かかる時代であつたがゆえである。

### （父母の死・涼庭の孝養）

文政四年（一八二二）三月八日、父の道庵義憲が亡くなった。諡（死者に対し、その生前の行いによつて贈る名）は中峯道庵居士、由良の松原寺に葬る。涼庭は『除喪の作』を作つた。

### 門逕蕭々薛蘿長く

幽窓坐せば夕陽斜に到る

一庭の桃李零落するに任せ  
忍び見る慈親手ずから植える  
の花

また、涼庭の母は夫に後れること九年、文政十三年（一八三〇）の夫の命日の三月八日に亡くなった。この十五年後、涼庭は城崎温泉へ湯治に行き、故郷の松原寺へも立ち寄っている。

京都を出発したのは三月十五日。二十五日の記事は「二十五日早起き、松原寺に詣り香典を捧げ先子の墓に謁す。母氏の墓も並び立つ。乃ち髪塚なり。実は京師高倉宗仙寺の中に葬る。母氏は里中岸田氏に出ず婦道貞正劬勞も又多し。余之を拝し泫然として涕下る。後の祭を主る者知らざるべからざるなり。敬く一絶を賦して祭文に代うと云う。万花飛び尽くして雨系の如し、骨肉携え来つて墓碑を排す。祖霊をして血食に飢えしめん事を怕る。犬豚猶未だ鴉兒に及ばず」

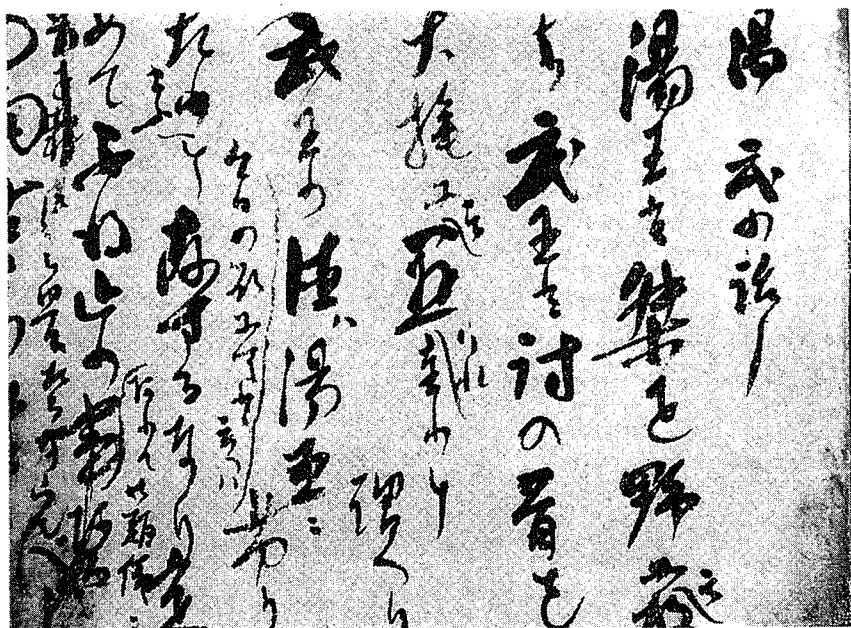
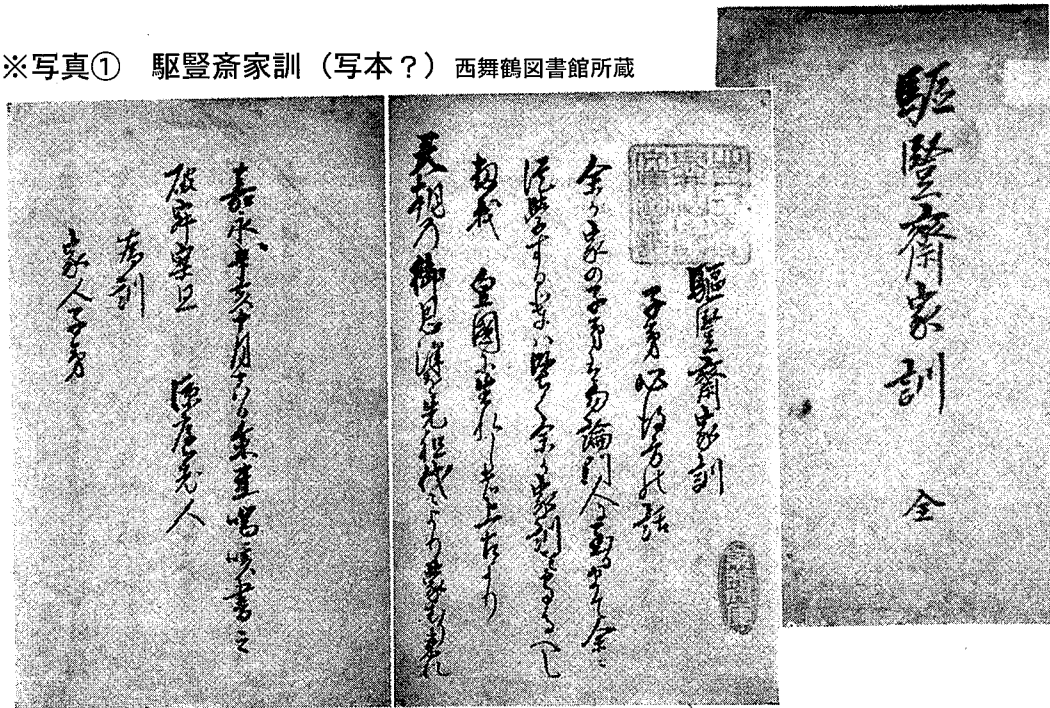
涼庭が父母の膝下にあつたの

は極めてわずかの期間であったから、その伝えられているところも多くない。その幼時馬家の学僕であった頃、夏には枯葉・朽葉などを集めて浴場を湧かす時、必ず裸体になったという。これは母の手織の衣類を汚すことを怖れたからであった。

また丹山に従って江戸へ行く時、母から贈られた銀五十銭を大切に貯え、その上に江戸の邸で十数人の児童に教えて得た銀三分の中から、筆墨の費を除いたものを加え、銀百二十銭で母のために青梅縮一および物品若干を買って帰った。さらに、のちに長崎に遊学した時、とくに藩から賜った修業料月俸二口と、今まで貯えた金全部とを父母に送った。京都に出てからの涼庭は当時の流行医であったから、孝養の点でもぬかりはなかったことと思われる。

参考文献・山本四郎著『新宮京庭傳』  
(ミネルヴァ書房)

※写真① 駈豎齋家訓 (写本?) 西舞鶴図書館所蔵



※写真②  
上：鬼国先生言行録表紙  
左：鬼国先生夜話(自筆本)  
西舞鶴図書館所蔵

お滝 = シーボルト



楠本稲子

稲  
タカ  
種  
彰  
聖子  
麻利子



シーボルト

※写真③ シーボルト

幕末の日本に医学を伝えた  
フォン・シーボルト (1796～  
1866) は、1823年オランダ商  
館の医師として長崎に着任。  
「鳴滝塾」を開いて高野長英ら  
に医術を教授。

いったん帰国したあと再び来日、1862年ドイツに戻った  
が、日本人女性 (長崎の女性 お滝) との間に女兒をもうけ  
た。楠本稲子で「おらんだお稲」と知られ、のちに日本初の  
女医となった。



「解体新書」  
西洋医学の翻訳書  
(一七四四年日本最初の)  
感じたようである。

○ 当時江戸には蘭学の名医  
杉田玄白、前野良沢がいた。  
江戸滞在二年間、これら先輩と接し、  
西洋医学のすばらしさをひひしと



# 万葉集

## 中西 衛

日本最古の歌集「万葉集」は、

八世紀末に巻一の最も古い部分を核に増補を繰り返して、現在見る二十巻四千五百四十首に成長しました。大伴家持やかもちによって編集されたとされています。聖武天皇の勅撰か、平成天皇へいせいの勅撰か二通りが考えられています。

「万葉集」の時代には、日本固有の文字である「かな」は、まだ発明されていませんでした。私たちは「万葉集」の「やまと歌」を漢字かな交じり文で読んでいます。例えば柿本人麻呂の有名な歌を次の本文で読んでいます。

東の野あづまのに炎かきの立つ見えて  
かへり見すれば月傾かたむねきぬ  
(東の野に、炎のように輝く  
暁の光が現れるのが見えて、  
振り返って見ると月が西の空

に傾いていた)

しかし「かな」発明以前の「万葉集」は全て漢字で書かれていました。しかも句と句の間にスペースや句読点は置かず、漢字を羅列しました。巻一、四十八番歌の原文は次のようになっていきます。

東野あづまの炎立かきたて所見み而反見かへりみ爲者もの月  
西渡さいと  
平安時代後期からは、次の様に読み下し文になりました。

原文の「東野」を地名、「炎」を野を焼く煙と解釈したこの読み下し方からは、辺鄙へんびな地の夜明けに近い野趣やそに富む情景が浮かんできます。  
天曆五年てんりきご(九五一年)に下さ

れた村上天皇むらむかみ《天慶九年てんけい(九四六年)〜康保四年こうほう(九六七年)在位》の命によって、漢字で書かれていた「万葉集」の「やまと歌」が体系的組織的に「かな」に移し変えられました。

「かな」の「和歌」に生まれ変わった「万葉集」の歌は、それまでよりもはるかに親しみやすいものとなりました。

二十巻四千五百四十首からなる「万葉集」が書写されるようになるのは十世紀末の一条天皇いちじょう《寛和二年かんわ(九八六年)〜寛弘八年かんこう(一〇一一年)在位》の時代頃からです。

堀河天皇の時代には、二十巻本の「万葉集」の書写の歴史の上で画期的な写本が登場します。冊子本の元暦校本です。

(一〇八七年〜一〇九五年)成立当初の「万葉集」は卷子本(巻物)でした。

冊子本は八世紀の中頃に中国で作られ始められました。九世紀の初頭に中国に渡った空海が密

教に関する経典を冊子本に書写して、日本に持ち帰ったのです。

冊子本の「万葉集」は少しづつ開きながら、冒頭から末尾までを連続して読むものでした。読みたい頁をすぐに開くことができ、検索しながら読むこともできる冊子本は、二十巻本の「万葉集」をより多くの人々に開かれたものとなりました。

藤原定家は晩年に秀歌撰「百人一首」を編みました。貞永元年じやうえい(一二三二年)です。その中に万葉歌人の歌が五首選ばれています。

一 秋の田の  
仮療かりいほの療いほの  
苦くるしみをあらみ  
わが衣手ころもては  
露つゆに濡れつつ

天智天皇  
《詠》秋の田のほとりの仮小屋  
の苦くるしみ(菅すげや茅かやなどを編んで  
屋根を葺いたもの)の目が  
粗あらいので、私の袖は露つゆに濡  
れてゆくばかり。

二

春すきて  
夏来にけらし  
白妙しろたえの

衣干すてふ  
天あまの香具山かぐやま

持統天皇じとう

《詠》春が過ぎて夏が来たらしい。夏が来ると純白の衣を干すという天の香具山なのだから、今白妙の衣が干されているよ。

三

あしびきの  
山鳥やまどりの尾おの

長々し夜を  
ひとりかも寝むねむ

柿本人麻呂かきのもとのおひとまろ

《詠》(あしびきの)山鳥の尾の、その長く垂れ下がった尾のように、長い長い秋の夜をひとりで寝るのだから。

四

田子の浦に  
うち出でて見れば

前記 二、四  
持統天皇の歌や山部赤人(平安時代には「山辺赤人」というのが一般的でした)の歌は、現代でも秀歌とされています。

白妙しろたえの  
富士の高嶺たかねに

雪は降りつつ

山辺赤人やまのべあかひと

《詠》田子の浦の眺望のきくところに出て仰ぎ見ると、純白の布のように白く高大な富士山に、雪は今もしきりに降り続けている。

五

かささぎの  
渡わたせる橋はしに

置き霜しもの  
白しろきを見れば

中納言家持ちゆうなごんやかもち

《詠》かささぎが翼を連ねて渡した橋の上に降りている霜の白さを見ると、夜もすっかり更けたことであるよ。

前記 二、四

持統天皇の歌や山部赤人(平安時代には「山辺赤人」というのが一般的でした)の歌は、現代でも秀歌とされています。

しかし、今日私たちが読んで

いる「万葉集」とは歌句が微妙に違ってきます。持統天皇の歌と山部赤人の歌は、今日では、それぞれ次のようになっています。

前記 二

春過ぎて

夏来たるらし

白たへの

衣干したり

天あめの香具山

(巻一・二八)

《詠》今、春が過ぎて夏が来ているのに違いない。まっ白な衣を干したよ。天の香具山は。

前記 四

田子の浦うらゆ

うち出でて見れば

ま白にぞ

富士の高嶺たかねに

雪は降りける

(巻三・三二八)

《詠》田子の浦を通って広々と

した所へ出仰ぎ見ると、なんとまっ白に、高大な富士に、あの消えることがないという雪が降り積もっているよ。

また「雪が降りつつ」ではなく「雪は降りつつ」であることが注目されます。

「は」は既に知っていることについて言うことばです。「消えることがない」と聞いていたあの富士山の雪は「という意味になります。赤人が今見るよりも昔から富士山の雪は降りしきっていたのです。

前記 一

稲刈りのために粗末な小屋で袖を露で濡らす天智天皇の姿は、古代の聖帝のイメージです。「日本書紀」には、仁徳天皇が貧しい民のために三年間課役を止めたため、宮殿は荒れ、衣も露に濡れる粗末な暮らしをしたところ、自然が感応して五穀豊

穰をもたらし、民が豊かになつたという話が記されています。この様な聖帝のイメージを下敷きに、「万葉集」の作者未詳歌をもと歌とする「万葉歌」が天智天皇の御製とされたのです。それは天智天皇が平安時代の天皇の始祖であったからです。醍醐天皇も村上天皇も血筋を遡ると天智天皇に行き着きます。

### 前記 二

天智天皇の皇女の持統天皇の歌では、第四区の「干すてふ」が重要です。「万葉集」のものと歌では、「干したり」と今白妙の衣を目にしたことに感動の焦点を置いています。「干すてふ」は「新古今和歌集」で初めて登場する読み下し方ですが(古点では「衣乾かる」。次点の一つに「衣干したり」もあります)、「てふ」という伝聞は、はるか遠い昔から白妙の衣を干すことが行なわれてきたことを表します。

大和国の聖山天の香具山で繰り返されてきた自然の神秘(定家は「白妙の衣」を卯の花と解釈していたようです)を、女性的に「衣」にたとえながら、印象鮮やかに詠んだ持統天皇の歌は、永遠の時間とともにあつた、(古代)の女帝の歌として、定家に深い感銘を与えたのです。

### 前記 三

人麻呂の歌は山鳥(キジ科のヤマドリ)の雄の、体長の二倍もある尾羽をたとえとして、永遠に続くかのような秋の夜長の独り寝の寂しさを歌っています。

山鳥は雌雄離れて棲むと考えられていました。「万葉集」巻八・一六二九「鳥の哀れさと人のわびしい心が一体となつています。その寂しさを単色のものに終らせずに、山鳥の尾羽の赤味のさした美しさによつて情熱的な彩りを添えています。

### 前記 五

家持の歌は、七夕の夜にかささぎ(カラス科の鳥。体は黒で肩から背にかけて白が入る)が、天の川を埋め尽くして橋となつて織姫を彦星のもとに渡すという、中国の壮大な伝説を踏まえています。夏や冬に「かささぎの橋」を詠む場合には、天の川そのものをさします。この歌の「かささぎの橋に置く霜」とは、初冬の天の川の、冴え輝く星々を表しています。

そして、「夜ぞ更けにける」は夜の時間の静けさを浮かび上がらせます。それは、織姫と彦星が逢つて別れた七夕の夜から今までの時間をも想起させるものです。幻想的な星空の空間を推移する時間の中で表現したのが、この家持の歌なのです。

鎌倉時代中期の東国において、「万葉集」の研究に画期がもたらされました。学僧仙覚に

よつて二十巻本の「万葉集」の大規模な本文校訂が行われ、「万葉集」の歌の全てが初めて読み下されました。仙覚は「万葉集」の初めての本格的な注釈書「万葉集注釈」も著しました。

仙覚が校訂した本文は現代の「万葉集」のテキストの低本となつていきます。仙覚の新しい読み下しも、現代に受け継がれています。山辺赤人の富士山の歌を「田子の浦に うち出でて見れば ま白にぞ 富士の高嶺に雪は振りける」と、初めて読み下したのも仙覚です。仙覚は「万葉集」研究史上の巨人です。

二十巻本の「万葉集」の印刷本、徳川家康によつて初めて刊行されました。慶長十一年(一六〇六)に二千部以上制作されました。寛永版本は七十五部程度、宝永版本が五十五部程度現存しています。

現代の印刷本に比べると少ない数ですが、写本の時代には想



像もつかない多さです。

江戸時代の国学者たちは、儒教や仏教の影響をまだ受けていないと考えた「古事記」「日本書紀」「万葉集」を中心として、

古人の「心」を理解しようとしてきました。契沖、荷田春満、賀茂真淵（元禄十年（一六九七）〜明和六年（一七六九））などです。

佐々木信綱は大正十一年（一九二二）の関東大震災による焼失などの数々の困難を乗り越え、大正十四年に「校本万葉集」（和本二十五冊）を完成しました。

明治、大正、昭和に入ると、国は文部省より「日本精神業書」を発行し、日本精神の精粹である「万葉精神」の復活を訴えました。

「万葉精神」は日本人の祖先が、天皇から庶民に至るまで、素朴な心をありのままに力強い調べで歌った「国民的な歌集」という万葉像を踏まえて「忠君

愛国」を一層強調し、「日本民族」「日本国民」の誇りと自信を高めようとするものでした。

聯合艦隊司令長官山本五十六も「万葉集」を戦場に携えて行きました。学徒出陣の特別攻撃隊の士官たちも「万葉集」の「忠君愛国」の歌によって、自らを奮い立たせようとする一方で、揺れ動く心の支えを恋歌に求めました。

参考文献：万葉集と日本人  
（小川晴彦 角川選書539）



# 庄内由良親善訪問団に同行して

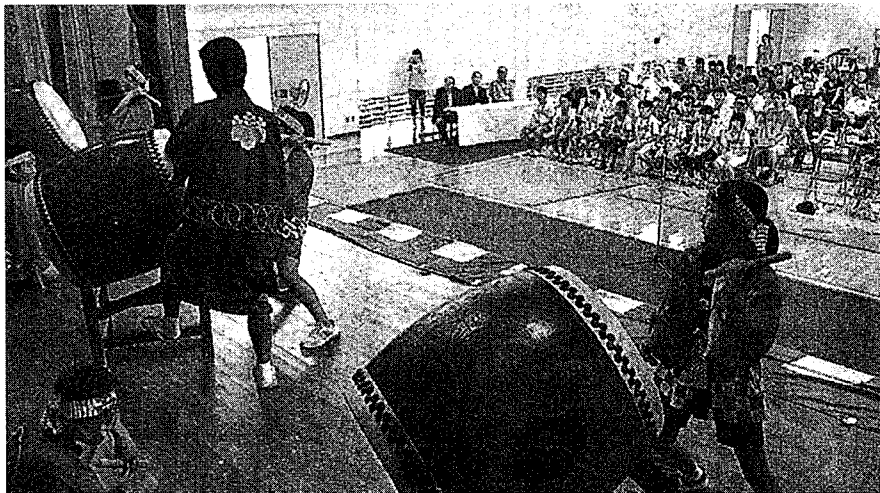
主事 磯田 充亮

一四〇〇年余前の飛鳥時代に崇峻天皇の第一皇子「蜂子皇子」が政変により都を逃れ、丹後由良から船で庄内由良に辿り着いたという伝説や、丹後由良の船頭が古里を偲んで同じ地名を付けたとする伝承もあり、昭和五

十三年夏に、庄内由良文化財愛好会会長佐藤儀助氏が丹後由良を訪問、昭和六十年に友好の浜の盟約を締結、「庄内由良・丹後由良友好の浜」宣言、鶴岡市・宮津市両市長のメッセージを交換し、三年毎に相互に訪問団を派遣し、現在に至っています。

平成二十四年夏に丹後由良から庄内由良を訪問しましたが、本来なら来年夏が相互訪問となる予定でしたが、庄内由良小学校が来年三月に閉校が決定。子供達に良い思い出となるようにと、一年前倒しでの訪問の申し入れがあり、心よく受託し「庄内由良親善訪問団」の歓迎式典を開催しました。

八月十七日（日）訪問団は早朝、庄内由良をバスで出発。午後三時頃到着予定でしたが、前日から京都府北部は記録的豪雨に見舞われ福知山市街地は冠水、また由良川が氾濫危険水位に達し国道178号線は通行止めとなり、やむなく高速道路を東舞鶴で降り、綾部安国寺〜宮津廻りで午後四時に到着。自治会長佐藤峰雄氏を団長として児童八名、大人十七名の元気な顔に接し一安心。休む間もなく「はまの子体育館（旧由良小学校体育館）」で歓迎会を開催しました。



奉納太鼓を披露する由良の子供達



「蜂子皇子船出碑」を訪れた庄内由良親善訪問団



花笠音頭を披露する庄内由良の子供達

歓迎会は丹後由良の児童らが、地区に伝わる勇壮な「奉納太鼓」を披露しておもてなし。今回は初めて両市から副市長が出席し「将来、両市の関係を深めたい」との挨拶がありました。（歓迎会については京都新聞に

掲載されました。）益々の発展を約束し歓迎会を終え、休む暇もなく皆さんは、蜂子皇子船出碑、今夏宮津市で開催した「北前船フォーラム全国大会」に出展した「北前船絵馬・模型」を展示している由良の戸千軒長者

の館を訪ねました。夜は二年前庄内由良を訪問したメンバーも加わり懇親会を開催しました。懇親会は、由良民謡クラブの演技や庄内由良小の児童による「花笠音頭」が披露されました。お土産に頂いた山

形の名産「神酒」「ダダチャ豆」を御馳走になり、お国自慢話等に花が咲き盛大な懇親会となり、三年後の再会を約束し散会となりました。



宮津市役所に表敬訪問された庄内由良親善訪問団

八月十八日(月)、庄内由良の皆さんは天橋立観光後、京都を観光して帰宅の予定。地元関係者は八時に由良神社前に集まり、帰路の安全を願い見送りとなりました。一部スタッフと子供達は同行し天橋立に向かいました。

今回は訪問団の要望もあり、初めて宮津市役所に立寄り表敬訪問を行い、更に友好の絆を深めることができました。

天橋立文珠に到着し、地元由良の四方俊一さん(宮津アテンド)とまちなか案内会)の案内で名所旧跡を訪ねました。当地の智恩寺(切戸文殊)、奈良の阿部文殊院(阿部文殊)、山形県の大聖寺(亀岡文殊)が日本の三大文殊との説明があり、ここでも山形県との関わりを知ることができました。「智恵の餅」を食した後、可動する廻旋橋を見学し、子供達と大人数人(有志)は自転車で松並木を散策しながら府中へ。他の人は観光船

で同じく府中へ向かいました。

天橋立は海を二分し宮津市文珠と府中を結ぶ、長さ三・六キロの「白州青松」の砂州で「神様が天と地を昇り降りするのに作られた橋の一部だろう」と、古代の伝説が語られています。

自転車組は、四方さんの案内で海の中洲にも関わらず真水が出る「磯清水」、岩見重太郎の仇討、千人斬りの場、船頭を化かし船に乗り対岸を往復するなどした、いたずらキツネ「橋立小女郎(こじょろ)」の伝説の場等に立ち寄り、お話を聞きながら目的地向へ。

その後、全員で最近パワースポットとして人気がある由緒ある「籠神社」にお参りし、リフトで傘松公園に上がり、絶景「斜め一文字」の天橋立を見て股のぞき、かわらけ投げで運試しをして歓声をあげていました。

昼食は「天橋立ワイナリー」で、新鮮な食材を使ったランチ

バイキングを頂きました。

庄内由良の皆様は、昼食後京都観光に出発。お別れとなりました。

お別れ時、バスの窓から別れを惜しむように、子供達はいつまでも手を振り「帰ってからメールする」との一言があり、子供同士の新しい友好が始まったと確認し、次世代の子供達がこの友好関係を引き継いでくれるものと思いました。

以上の行程で庄内由良の皆様をお迎えしましたが、庄内由良の訪問時に受けた歓迎ぶりには遠く及ばなくても、関係各位の皆様のおかげで遠来の客を受け入れることができました。

以後、宮津市と鶴岡市との友好宣言を期待し、歓迎会で庄内由良の佐藤空凱君が「二つの地域のつながりを、地元の人達にも広めたい」と話したように、当由良地区の皆さんも関心を持って、友好活動の発展に努めて頂きたいと思えます。



山形県鶴岡市庄内由良歓迎交流会参加者

### 平成25年度 宮津市人権標語入賞作品

持てますか？ 自分の言葉に 誇りと責任 (中学3年生)

受取った 優しさ みんなに広げよう (小学5年生)

言っちゃだめ 人がかなしむ その言葉 (小学4年生)

### 編集後記

2014 (H26) 11月

実りの、スポーツの、読書の  
 …など秋の季節表現はたくさん  
 ある。一年の中で一番過ごしや  
 すい季節を迎えた。稲作は夏の  
 日照不足、多量降雨の影響で少  
 し小粒になったようだが、台風  
 の影響も少なく収穫された。10  
 月に入り2週続けて列島を直撃  
 した台風18・19号、強い勢力を  
 持ったまま縦断し、雨量が多く  
 強風にあおられ大荒れの状態だ  
 ったが、由良地区はケガ人も出  
 ず、建物にも大した被害も無く  
 胸をなでおろした。晴れば干  
 ばつ、降れば洪水、温暖化の影  
 響で今後このような天候で推  
 移すると気象庁は発表してい  
 る。天候を嘆いても前進しない。  
 私達は、このことを常に認識し、  
 今後に対応しなくてはならない  
 時代に入ったと考えよう。

(枝川)

